

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和四十八年六月十五日發行(毎月一回・十五日發行)

(通第二八九号)

慈

光

第二十五卷

第六号

次

夢幻の人生と真実の如来……………近角常観……………(1)

佐伯定胤猊下の追憶(一)……………福島政雄……………(4)

師を求めるころ(二)……………信国淳……………(6)

一道会の記(三)……………榊原徳草……………(13)

目

念仏詩抄……………木村無相……………(18)

教えられることども……………花田正夫……………(21)

夢幻の人生と眞實の如来

近 角 常 観

現代の社会は夢幻の人生に執着し過ぎている。否、吾々凡夫として此人生に執着していることは昔も今も変わらぬのである。ただこの人生に執着することによりて、眞実なる人生を求めんとすることは全然方角を間違えてゐる。眞実なる人生々活は、人生の夢幻なることを覚了してはじめて眞実の人生は来るのである。否、むしろ此人生は徹頭徹尾夢幻であるが故に、これを憐みまします如来の眞実がましますのである、人生が夢幻なるが故に眞にこれを悲愍せられて無明の暗夜を照らさんために、尽十方無碍光如来が影現（ようげん）しましたのである。これを救済せんがために法性自然（ほっしょうじねん）の報土を建立し給うたのである、これを化度せんがために煩惱の林に遊び、生死の園に入りて益物度生（やくもつどしやう）きわまりないのである。人生は生老病死の苦海なるが故に、大悲の願船ましまして我を喚びて乗せたまうのである。

大經の偈（げ）に、一切の法は猶し、夢と幻と響との如

人の鬼魅（きみ）に著せられて狂乱所為多きが如し、とある。

我等衆生は煩惱のために狂わされて、凡夫顛倒の所為を為しつつあるのである。これをみそなわす如来大悲の眞実は、起ても居ても安んじたまわぬのである。歎異抄に、仏かねてしろしめして煩惱具定の凡夫と仰せられたが実に我等のことである。そのやるせなき御心より五劫思惟の本願をたてたまうたのである。兆載永劫の苦行を修したまうたのである。実に五劫思惟も兆載の修行も、ただ親鸞一人がためなりけりというは、実にこの如来大悲の眞実の親心をいだかれたる信相である。

ここに信仰問題について大いに注意すべきことがある。

私が罪が深いために如来様にご苦勞をかける、親様に心配かけると云うて、かえってそれがために苦しむものが多いそれは大いに方角違いである。親の苦しむのは子の苦を減じようがためである、否、親の苦しむというは、苦しう思ふて苦しむのではない、子の苦しむのをいたわるのである。親の狂乱は子の狂乱を憐む心のあらわれである。それ程の親の心をいただけば、狂う心も安らぎ、煩惱の心も融けるのである。借金に苦しむものを憐みて、引受けてやろうという声をきいて、その親切に対してすまぬというて苦しむものがあつたならば、それは借金を引受けて貰うたの

しと覺了して、諸の妙願を満足して必ずこの如きの刹（せつ）を成ぜん。法は電と影との如しと知りて、菩薩の道を究竟し諸の功德の本を具して、受決してまさに作仏（さぶつ）すべし。諸法の性は一切空無我なりと通達して、専ら淨仏土を求めて、必ずこの如きの刹を成ぜん、とある。

実に人生は夢であり、幻である。それを憐み給うが如来の眞実である。実に人生は罪惡であり、煩惱である。それを憐みたまうが仏陀の眞実であり、清淨である。人生は闇黒であり、無明である。それを照らし給うが無碍光であり、清淨光であり、歡喜光であり、智慧光である。

実に如来は闇黒なる人生の光明である、夢幻の人生を喚びささんがために、一如法界（いちにょほっかい）の境界より來現しましたる眞実大悲の父母にたまします。

涅槃經に、如来は一切のために、常に慈父母と作りたまへり、当（まさ）に知るべし諸の衆生は、皆これ如来の子なり。世尊大慈悲、衆のために苦行を修したまうことは、

ではない、かえって恩誼や人情につまされて苦しむのである。如何に借金が多かろうとも、如何に煩惱熾盛であつてもみなこれ狂乱の所為なりとて、飽くまで憐みたまうが如来大悲の眞実である。この眞実をいただくが眞宗である、即ち念仏成仏は眞宗である。

もし少しでも自ら清くすることによって、眞実にすることによって、斷惡修善することによって、如来のお心になわんと思ふならば、それは不可能である、万行諸善是假門（けもん）である。

人生は唯夢である、幻である、そらたわごとである、火宅無常である、煩惱具足である、ただ念仏のみぞまことである。和讃にもある、

念仏成仏これ眞宗、万行諸善これ假門

權實眞假をわかずして、自然の淨土をえぞしらぬ
吾等の期するころは自然の淨土である。

五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりになてながく生死をすてはてて、自然の淨土にいたるなれば信は願より生ずれば、念仏成仏自然なり

自然はすなわち報土なり、証大涅槃うたがわす唯々やるせなき如来眞実の本願力自然にひかれて、念仏成仏自然にいただくが、如来廻向の御力である。かくて自然の淨土に往生して自然のさとりをひらくのである。

歎異抄に曰く。口には願力をたのみたてつまるといいて心にはさこそ悪人をたすけんという願不思議にましますというとも、さすがよからんものをこそたすけたまわんずれとおもうほどに、願力を疑い、他力をたのみまいらすところかけて、辺地の生をうけんこと、もともとおもいたまうべきことなり。信心さだまりなば、往生は弥陀にまかせまいらせてすることなれば、わがはからいなるべからず。わろからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまいらせば、自然のことわりにて柔和忍辱のころもいでくべし。すべて往生にはかしこきおもいを具せずして、ただほれればと弥陀の御恩の深重なることをつねにおもいだしまいらすべししかれば念仏も申されそうろう、これ自然(じねん)なり、わがはからわざるを自然とは申すなり、是即ち他力にてまします。

と。本願力も自然である、信心開発も自然である、火宅の利益も自然である。往生も自然である、浄土も自然である、さとりも自然である、浄土の莊嚴も自然である。自然快樂の音声である、自然の徳風が念仏念法念僧の声をなすのである。唯仏与仏(ゆいぶつよぶつ)の智見である、虚無之身無極体である、畢竟逍遙として有無を離るるのである。自然に還相廻向の利益があらわるるのである。覚めたるものは眠れるものを呼び覚まさずには居られぬのである。

る。

弥陀の願船に乗じて生死の苦海をわたり、報土の岸につきぬるものなれば、煩惱の黒雲はやく晴れ、法性の覺月すみやかにあらわれて、尽十方無碍の光明に一味にして、一切衆生を利益すること、釈尊の如く、自由自在に蘭林遊戲(おんりんゆうげ)の徳を修すること自然である、これ実に五濁惡時、惡世界中において、本願円頓一乗のますます顯現する所以である。

和讃に曰く、

南無阿弥陀仏の廻向の、恩徳廣大不思議にて
往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せり
往相廻向の大慈より、還相廻向の大悲をう
如来の廻向なかりせば、浄土の菩提いかがせん
弥陀・観音・大勢至、大願のふねに乗じてぞ

生死の海にうかびつつ、有情をよぼうてのせたまう
これ夢幻の人生中において如来真実の大海より化現して、一念および一時に無垢莊嚴光(むくしょうごんこう)を放って、益物度生したまう恩徳である。

大正五年二月『求道』第十三卷第一号より。

佐伯定胤 猊下の追憶(一)

福島 政雄

おもえば四十年の過去となった。私が四十歳を越えた頃、聖徳太子への感激が新たに湧き起って、千三百年の古刹法隆寺に始めてお参りをした。併しその時の私はまだ猊下(げいか)を識らなかった。越えて昭和六年の夏、渾沌社の主催で法隆寺において講習会が行われた。此の時に私は始めて猊下の御声を聴き御すがたに接した。

これから後の私には次第々々に猊下に親しみ申上げる御縁が開けた。昭和七年の夏には法隆寺に籠って十日間ほど猊下から唯識(ゆいしき)の御講義を聴いた。八年の夏には八日間ほど籠って太子の法華経義疏による法義経の御講義を聴いた。九年の夏は勝鬘経、(しょうまんきょう)十年十一の夏は維摩経という次第、御講義を聴く度に猊下への親しみは増していった。

昭和十二年の夏には、豊後の由布院までおいでを願ってまた唯識の御講義を願って、また唯識の御講義を聴いた。深遠なる唯識論を猊下は実に懇切にお説き下された。私は

わからぬながらに次第にひき入れられて行く感じであった。唯識論はわからないでも猊下から深い何物かをいただいた気持であった。

古来の伝統的な学び方で唯識を学んだ方は、猊下が最後のお方であると承って居た。誠に猊下の唯識は所謂近代の学者の学問とちがって全く猊下の御身についた学問であったと私は拝している。猊下は唯識であり、唯識は猊下であった。猊下の唯識は猊下の生命の根元であった。私は今でも阿頼耶識(あらやしき)についての猊下のお言葉をまざまざと想い起すことが出来るように思う。主観界も客観界も阿頼耶識裡において表現せられて居るものであるというお言葉によって、私は此の現実の世界の根元を開かれたという感じがしたものである。猊下に導かれて私自身も阿頼耶の根元の上に現行(げんぎょう)して居るのである。

併し唯識については私は多くを言う資格が無い。それよりも太子と私の関係において猊下は私を限りもなく導い

て下された。太子についての私の浅薄な考は次第に打破られて行つた。私は太子の生命を猥下によって深く感ずるようになった。

先ず印象が深いのは聖霊院の朝の勤行であつた。猥下は誰よりも早く一番に聖霊院に御いになった。朝の四時半頃でもあつたろう。五時過ぎて私どもが参り揃うと勤行が始まる。

我昔所造諸悪業（我昔、造るところの諸悪業）

皆由無始貪瞋痴（皆、無始の貪瞋痴に由る）

と御導き下された御声は今なお耳の底に留って居る。心経、観音経、陀羅尼（だらに）、太子和讃というような順序で勤行がすんで、夜も明けはなれたあのお池の前を猥下がお通りになる時、私どもはその御姿を尊く仰いだのであつた。

聖霊院の御本尊、太子摂政の御姿の厳然たる御顔を特別の日に扉を開いて拝ませていただいた時、そしてその厳かなお顔には無限の温情が漂っていることを感じた時、私には太子の御心がはつきりとなって来た。その後猥下の厳然たる御姿と無限の御慈愛とが私の身にしみて感ぜられるようになって、私には猥下を通しての太子が生きて私の心に触れて下さることを感ずるようになった。

師を求めるところ (二)

△むなしくする▽

私はフランス文学をやりたくて東京に行きました。その当時フランス文学は京都大学にもあつたのですが、京大の先生は、私の学んだ高等学校にも来ておられ、大分わかつていたという関係から、あまり関心がもてなかった。が、東京の方は未知の学校ですし、そこにはその当時、辰野隆とか、鈴木信太郎とかいう今日では有名になられた先生がおられた。そういう先生方の文章を早くから読んでいたということもあって、なにか東京へ行きたくなってふらふらと上京してしまったというわけです。

ところが、まことに遺憾なことに、私があこがれて、師を求めて東京へ行って出会った先生に、実は私はすっかり失望してしまつたのです。東京での三ケ年は、師を求めるということに於ては、全く私の期待が裏切られて、失望の中に過した三ケ年間であつたように思えてならんのです。私には、東京で師を求めて得られなかったということが

十年間太子の大精神を仰ぎ求めて、私が『日本教育源流考』を著述した時に、最も深く喜んで下されたのは猥下であつた。今は世に亡き柳川重行君から聞いたことであるが、猥下は此の著述を読んで下されて、こんなことも書いてある、あんなことも書いてあつたと仰せられて非常に御よるこびになって居たということである。未熟な著述をそんなに御喜び下されたのは猥下が太子に対したもう御熱意のあらわれであつて、一方では此の私を励ましすめたもう御心持であろうと思う。

（未完）

老の坂たどり行く身は法の友を恋うる心のしみじみと湧く

老の身の望みは深しふみ読みて教の道をなお辿り行く

四十八年一月末 詠



信 国 淳

大変深い失望だったのです。というのがそれからずいぶんと年が経って、十年も二十年も後になって、当時の夢を見るのです。それは何回も見ただけですけれども、東大の構内を、カバンをかかえてせかせかと歩いている自分の姿を夢に見るのです。それはなにか、求めるものが得られない失望と空虚感にかり立てられて、せかせかと構内を歩き廻っている自分自身の姿なんです。全体が非常に暗いし、せつない気持なのです。そして夢の中で私は思い出しているのですね、——ああこれは失なわれた時だなど、そんなことを思い出しているのです。

というのは、その頃流行したフランスの小説家にブルーストという人がいて、その人の小説の題に「失なわれた時を求めて」というのがあつたんです。その失なわれた時だなどというのを私は夢の中で思っているのです。そんな苦しい夢を私は度々見た。そのことによって知られるように東京での三ケ年間は、私にとって本当にロスだったという

気持が強くあるわけです。又従って東京で過した三ヶ年間は、何か私にとり本当に生きることの無意味さを感じさせられた三ヶ年間だった。つまりね、本当に自分をとらえ、自分を感じ入らせるようなものの全くなかった三ヶ年間——そうだ、これで一つやっていこうというような、生き甲斐を感じることもなかった三ヶ年間だったと思うのです。

その頃読んだフランスの詩人、アルフレッド・ヴィニールという人の日記に「時を殺す」という言葉があった。その「時を殺す」という言葉が私には、当時の自分の生活を言い当てたものであると自分でも受けとれたものに違いない——この言葉が私には強く記憶に残っているんです。つまり時といえば、私達の生きる時間、時間といっても私達の生きる時間、生きる生、その生への関わり合いが、それを殺すという関わりあいなんです。殺すとはそれをなきものにすることです。自分の生きる時間への自分の関わり合いが、こちらからそれをなきものにしてかかるという、つまり生き甲斐のないものにしてかかるという、そういう関わり合いを私はやっておったように思うのです。時を殺す、——生きることは無駄なんだと、ただ時間を殺してかかる。つまり文字通りの「空過」——ただ空しく時間を過して、ゆくのです。自分自身の生きる時間へのその関わりあいをもって私は東京での三ヶ年を空過したと思います。

一緒に入られるという話を聞いて、もうそのことだけで：妙なものです。私にとっては大きな喜びであったのです。

昭和四年の四月十六日、洛北の或る料亭で、一緒に入った十六人の新任の先生達を主賓にして、大学側がお祝いをして下さった。私はその時に池山先生を初めてこの目で見ることができたのです。そして、一目惚れということばかりありますけれども、一目見て私は先生にすっかり惚れ込んでしまった。まあ、その時の感銘がそんなに深かったという事です。人間と人間との出会いはむろん理屈が会わせるのではなくて、いわば互に求めていたものが、出会った瞬間忽ちにして、そこに出会いを成就するという、そういう微妙な関係があるように思う。

しかしその出会いが出会いとして、事実私において本当に成り立ったのは、ずっと後のことなんです。先生が私にとって、あまりにも私の求めていた人であったが故に、私はそのために却って先生に近づくことが怖かった。だから私は先生をいわば遠くから見ているという関わり方でその後ずっと先生から目を離すことがなかった。そしてその間私は私なりに、先生に直接会おうとしないで、先生に会うことはむしろ恐れながら、自分の問題を自分なりに解決しようと思って、自分なりの歩みを進めていたようです。

しかしながら、そのことは——つまりそんな「時を殺す」というような言葉を、私が私の言葉としてもったということは、そういうかたちで何というか、それでよいのかという問いを、何ものから私が問いかけられていたということであったのかも知れんです。一刻一刻を生きる、その一刻一刻に自分の全てを高く献げて、本当に生きられる生き甲斐のあるものに出会いたい。そういう生き甲斐のある生き方を私自身に教えてくれる先生に、何としても出会いたい。そんな要求がそこにまたあったのかも知れんです。つまり私は教えを求めておったんだと思うのです。教えてくれる先生を、師を求めておったんだと思うのです。

△池山先生との出会い▽

そういう先生には東京では出会うことができなくて、卒業してすぐそのまま縁あって、京都の大谷大学にやってきました。そして大学に勤めるようになったことが、実は私の今日を今日として決定したのだと思います。私が大谷大学に昭和四年にまいりましたが、その年はどういふものか大勢の先生が同時は就任しましてね、その中に私の「有縁の知識」となった、——私のためにその後有縁の知識となつて下さった池山栄吉という方がおられた。先生の名前は早くから知っていましたし、先生の書かれたものも早くから読んでおったんですけれども、それだけに先生が自分と

で、それはどういう歩み方であったかという、私の問題は、私自身の意識の問題で、私は私自身の意識に苦しめられておったのです。自分の思うこと、考えることのために自分自身を苦しめられておった。まあ明け暮れあのことを思い、このことを思うわけですから、そういうことを『歎異抄』のことばでいえば、

「一生のあいだ、おもいとおもうこと、みな生死のきずなにあらざることなれば」(第十四章)

ということになる。つまり思うことの全てが逆に私自身の生活を満たされないものとして、思う私自身を圧迫してくる。こういうことがあって、私は何とか自分の思いから脱出できるものなら脱出したいと思っていたと思うのです。それでもなにか美しいことを思ったり、素晴らしいことを思ったりできる時には、そうして思うことに自分ながらほれぼれとなることもあった。けれども全体的に云えば、思うことが実は私自身を悩ましておったという関係があったと思うのです。従って、そういう思いの中からなんとかして脱け出したいという努力が、自然的に私の内におこってきたと思うのです。だからそれは結局は、自分自身の意識生活から脱け出したいという要求であったといえると思うのです。

そういう私が、私自身のために開いた一つの突破口は、

單純なものを單純に愛するということであつたようです。そして愛するということになると、それはもう全く直接的です。東京から帰つて来て、東京で満たされなかった私のところが、外に向つて開き始め、流れ出すことになったのは、当時私にとって従妹になる五つか六つの子が私の家に身を寄せていたからです。不幸なことにその従妹は、そのすこし前に両親を同時に失ないましてね、孤児になつていたので。東京から帰つた自分の家に思いがけなく、そういう幼い、不仕合せな女の子がいたのです。そして両親を失なつた女の子だけに、東京から帰つて来た私に非常になつく。私もそれを可愛いと思う。そういうことでその子と遊ぶ時間が多くなつた。遊ぶといつても相手は幼稚園へ行く前の幼い子供のことで、ごく單純な遊びしかできないわけですね。その子と一緒にこちらですっかり子供になつて、いろんなことをして遊ぶ。手をつないで野原に出てみたり、山に登つてみたりする。そしてそこに私は東京での学生生活の中で悩んでおつたその悩みから、一つ突破口を見出したような感じを持ち始めました。自分の生きている喜びを、その幼い者の上にかける愛情としてはじめて感じる事ができたように思うのです。

それから又自然ですね。草とか花とか樹木とか、或は空とか風の音とかによつてあらわされる自然に直接触れてい

のです。そういう自分の生活の姿勢全体というものが、自分にも次第にはつきりわかつてくる。そして自分が自分自身に安定して生きたいものだという願いが、いつしか次第につのつてきたと思うのです。

△念仏―伝統のころ▽

そういう或る時のことでしたが、私にふつと思ひついたことがあつたんです。それは、私達の間には「念仏」があるではないかということなんです。現に私の周りでは多くの人々が念仏を称えているではないかということなんです。

そして私が念仏を思ひ出したということには、そこに私が幼少の頃から、母に手を引かれてお寺参りをしたということ、そしてそこで地獄、極楽の話を聞かされるとともにいわゆる善男善女が口々に南無阿弥陀仏と称えるすがたを見、称える声を聞いていたということがあるわけです。つまり私は子供の時から、念仏の声を身体に受けて大きくなつたということがあるわけです。

念仏があるではないか。―その念仏がなんであるかは今の自分にはわからぬけれども、ともかく既に念仏が人々によつて親しまれている。そしてそれは我々の精神生活と無関係でなく、何かそこに深い関わりがあればこそ称えられているのではないか。しかも、その事はたんに今日起こつたことでなくて、何百年も何千年も昔から行なわれ続けられ

く。そういう自然を鑑賞する生活が、やはり一つの突破口を私に教えてくれたようです。そしてその突破口は、私にとっては歌をつくり詩をつくるという生活になって始まつてきたと思います。それは一つの審美的、耽美的性質をもつた生活であつたことができます。

ともかくそういうことで私は、やや自分の内面生活に明かりが射し、生活が豊かになつたという感じをいくらかもつようになりました。しかし、そうして美しいものに慣れて生きることは、同時に又却つて、自分自身の中に絶え間なく動く薄汚いものをいよいよはつきりと意識させるといふ全く皮肉なことになりましたね。自分の問題は解決するどころか、依然として自分が自分と一つになりきれない、自分が自分自身に満たされないというものがあつて、それが私につきまとい、私を悩ますことに變りがないのです。従つて生きていくことが、私にはいつも自分の前を自分が逃げるというような格好で……。自分の出會つていく一瞬一瞬を、自分はいつも浮き足だつて、前向きに体を傾けながら、何かを追い求めていくといった格好の生き方なんです。

そこにもはや現実の、刻々の自分自身と一つになつて、真直ぐ姿勢を正しながら歩くという、大地の上を一步一步踏みしめて歩くという、そういう安定感が全く欠けている

てきたことではないのか。ともかくはつきりわかつているのは、法然とか親鸞とかが我々の祖先としてこの世に、この国に生まれて下さつて、念仏を自覺的に明らかにされたということである。こういう方々は、念仏が我々人間の生活に深い関わりをもつものとして教えられたものに違いないしそしてその教えが今日まで傳承されてきているという事実がある。そういう教えの傳承の中で善男善女が、念仏の意味がわかるとかわからんとかは別にして、ともかく称えているという事実が現に目の前にあるではないかと、こんなふうには私はふと思つたのであります。

そして私もとにかく称えましようという氣持になつた。わかつて称えるということではなく、ともかくも称えましよう。そしてそのことによつてもし教えられることがあるなら教えられていきましよう。ともあれ、まず言葉として念仏を受け、口に称える声としてそれをあらわしていきましようという氣持になつた。こうして私にも、どうやら初めて念仏の生活が始まりました。それは家内と結婚して間のない頃のことでした。

ところで、そうして念仏を称え始めることによって、私は自己の内面生活に初めて眼が向いたといえるのかも知れません。ともかく口に念仏を称えることによつて私には、同時に自分自身の内面へ自分の眼が届くということが始ま

ったようです。というのが、私はとにかくにもある一つの決意をもって念仏をとりあげたわけです。ですから、念仏を称えることが非常に意識的なんです。つまり自分の努力をともしなうわけです。念仏を称えることに自らの意識を集中したのです。だから、もちろんいろいろな妄念がおこってくるが、それとの戦いを通して、他人がおろうがおるまいが——まあ他人のおる時は大体避けたようですけれどもとにかく心持の上では時処諸縁を問はずといったような、そういうかたちで念仏に自分の意識を集中しました。集中することによって、つまり努力すればするほど向うから、逆に抵抗してくるものがある。抵抗してくるものとして、自分の精神生活の内面が自分の目前に現われてきたというわけです。

念仏に意識を集中することによって、却ってそれに背こうとするものを感じる。そういうことによって私は、自分の内面生活が鮮かに自分の眼にうつるといふか、そういう瞬間を迎えることが多くなったように思います。はじめて自分の精神生活に向き合ったという感じ、そういう鮮明な感じがまず私に、念仏を称え始めたことによって教えられたことを思い出します。

△浄土への目覚め▽

そういうことで、私の中で動かなければならぬはずのもの

下さるおことばであった。

池山先生との出会い、そして聖人との出会いを通して私は、自分のかたわらにある人に自分とが一つにつながれている事実を、初めて知らされることになった。あらゆる人々と自分とが全く一つにつながれている世界。自他一切の——あらゆる生命、あらゆるものの一つにつながれている世界、Universalityの世界。それを仏教では一如の世界というのでしょう。その一如の世界というものが、私の最初に云いましたような問い——どこで私どもはゆきちがいのない世界をもつことができるかといひ問いに、はつきり答える世界であるということを、私は初めて教えていただいたのです。だから私にしてみると、私の師を求めたということとは、実はそういう世界をこそ、私が求めていたことになるわけです。簡単ですが、ざっと以上のことを感じました。

△続く▽



のが終に動いたわけでありす。その動かなければならぬはずのものは、池山先生を思い出すということです。

私は、念仏を通じて出会った自分の精神生活を歌に表わし、それを先生に宛てて送りました、それは

雲霧のゆききひまなきころぞと知りはそめてきみ
名となえしより

というものです。

丁度年末のことで、私は年賀状の端にこの歌を書き添えて出したのです。すると折返し先生から便りがあって、一月五日に自分の所に信仰の友達が集るから、君もひとつ出てこんかという案内が書き添えてあったのです。それで、五日にお邪魔して、とりまきいゆる信仰の友達の中に加わって、私は初めて先生のお話を親しく聞く機会をもつことが出来ました。それまでに先生のお話は公開の席でしょっちゅう聞いていましたけれども、先生の居間で親しく聞いたのは、あの時、あの歌を縁としてでありました。

で、その池山先生という方は、私に親鸞聖人のそばへ行きなさい、聖人の教えの前にぬかづきなさいと、直接教え下されたこの世での唯一の人となったのです。こうして聖人と私との出会いは、池山先生を仲立ちとして、はじめて私のために可能になったのです。そしてその聖人のおことばは、私が幼年時代から求めていた人間の問題に答えて

つれづれ草 (百五十七段)

筆をとれば物かかれ、楽器をとれば音をたてんとおもう。盃をとれば酒を思い、さいをとればうたん事をおもう。心は必ず事にふれて来る。かりにも不善のたわむれをなすべからず。

あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ、率爾(そつじ)にして多年の非をあらたむる事もあり。かりにいま此の文をひろげざらましかば、この事を知らんや。これ即ちふるる所の益なり。心更におこらずとも、仏前にありて数珠をとり経をとらば、怠るうちにも善業おのずから修せられ、散乱の心ながらも繩床に坐せば、覚えずして禅定なるべし。事理もとより二ならず、外相をむかざれば、内証必ず熟す。しいて不信を云うべからず。あおきてこれをとるとむべし。

全 上 (百三十一段)

まずしき者は財(たから)をもて礼とし、老いたる者はちからをもて礼とす。おのが分を知りて、及ばざる時は、速にやむを智というべし。ゆるさざらん人は人のあやまりなり。分を知らずして、しいてはげむはおのれが誤りなり。まずしくて分を知らざればぬすみ、力おとろえて分を知らざれば病をうく。

一 道 会 の 記 (三)

榊 原 徳 草

続いて、向島諸宣先生の御話は次のようでありました。

御指名にあずかり暫く話させて頂きます。去年の会には時間に遅れまして、白井先生と後の坐談会に出たのみでありました。

私は若狭の小浜に自坊がありますので、京都の学校（産業大学）に勤めておりますが週の半分は帰って居り榊原さんの寺にお邪魔にもあがらないようなことで……。先日一道会の通知を受けまして、自坊の報恩講の日も未定でありましたので、今日を待って居りました。

私もこれで平均寿命を越えてしまっておりしますので、何時この世をお別れするか判らん、この機会をのがしたら、一期一会で、いつお会い出来るかわからない、浄土の聖衆がたと此の世でお会いする機会が或は来ないかもしれぬ、という気がして参った次第でございます。

私はお話する柄でもないのですが、毎年の例によって池

山先生とご縁を結んだ者が何か一言話さねばならんようなしきたりなので、止むを得ずお話すわけなんです。

池山先生について色々なことが思われますが、一番私が思いますことは、先生はかつて御自身の体験しないことはお話しにならなかった。得てして私共は頭で解ったことはそれで体験出来たことくらいに思う危険性を持って居るんです。理解したことが身に着いたものと思いがちでありますが、實際は身に着いて居ないで頭だけで解ったにすぎないことが多いものです。それは他人ごとでありません、私が学生時代に哲学を嚙ったものだから特にその傾向が強いと反省させられているんですが……。京都学生親鸞会のあった頃、東山のお寺で主として今の京都女子大、当時の女子専門学校の学生を中心とした女子親鸞会が開かれて、私も時々お手伝いしたことがあります。或時、池山先生にお願ひして講演会を開きました。その時、私は一寸その頃考えついたことがありまして、時間と永遠ということ、

真宗的に言えば娑婆と浄土ということですが、それを図示しまして先生に見て貰って、こんなに思うんですが、如何でしょうか、と申上げると、先生はこれを見て居られて、それはその通りでしょう。しかしねえ君、これが君の身に着かないと駄目ですよ、と云われたことがあります。理屈はその通りだがそれが体感になっているか否か、実感になるかどうか、ということを教えて頂いた、お叱りを蒙ったわけです。

そういう風なことを思い起さします。そういう意味で池山先生の仰言することは、お念仏が先生の肉体の中に這入り込んでしまっている、しみこんでしまっている、そういう意味の体感が基礎になっていないならば、どんな立派なことを云っても無駄であるということなんでしょう。

もう一つ、京大の東昇教授が「池山先生ほどの偉大な人格を未だ曾て見たことがない。私は世界各地で偉い人に会ったけれども池山先生程のヒューマニストにはお目にかかったことがない」と云っていられますが、ヒューマニストという言葉はどういう意味で使われたか知りませんが、これには色々の意味があるようです。これを仏教的に考えたら同悲同喜する人、他人の悲しみを自分自身の悲しみと感じ、他人の喜びを自分自身の喜びと感じ得る人を本当のヒューマニストと云えるのじゃないかと思うのです。我々

は所謂、隣家に蔵が建てば腹が立つという粗末な人間ですが、先生は人が悲しむ時、本当に一緒に悲しまれる、人が喜ぶ時は本当に喜ばれる、そういう仏教的に云えば同事の行（ぎょう）を身につけた菩薩に等しい一面をいつも我々は感受しました。

人の悲しむ時に自分も悲しむということでは、榊原先生が慈光誌の池山先生生誕百年記念号に書かれた中に、榊原先生と近角常観師の御息が出征される報せを見て、先生は一夜転々反側して眠られなかったというお話がありました。まるで自分の子供が出征して戦地に行くように痛切にそれをお感じになる、こういうことは我々に一寸できかねるのですが、池山先生はそうであった。

又、私自身のことですが、先生の歿後に記念号として出版した『呼子鳥』に私一寸書きましたが、或る用事で先生をお訪ねした所、非常に歓待して頂いて、当時私は等持院に住んでいましたが、等持院へ帰る近道を教えると云われて、大分長い山道を送って来て頂いて、ここからあの道を行けば出られますと仰言って、私は大分歩いて振り返って見ると、先生はまだ見送って立っておられたことがありました。今云ったある用事というのは、先生の所へ非常に親しくお伺ひして居られた可愛い娘さんがあって、その方を実は私の弟の嫁に欲しいと思ひ、お願ひに行ったのです。

すると先生は非常に喜ばれて、奥様に向われて、向島さんがあの娘を弟さんの嫁に欲しいと云って来られたんだよ、と仰言ってから、私に、だが残念ながらたった今その娘の縁談がきまったので、と残念がられ、だがそう云って来られたのは非常に嬉しい、と仰言ったことがあります。

本当に自分の娘が貰われるような気持ちで心から喜んでおられ、まあ御寿司もあることだし、一緒に食べて行けという事で御馳走になりました。他人の娘を自分の娘のように配慮される、こういうことが先生のヒューマニストの一面じゃないかと感じるのです。

しかし、これもお念仏の一つのお徳なので、先生が生れつき立派な人格を持って居られたのかも知れませんが、それに一倍の磨きがかかったのはお念仏のお徳であろうと推察するのであります。皆様も色々先生について経験がありと思いますが、こう云う点がございました。

話は少し変わりますが、先生が偉大なヒューマニストだと言われたこと思い出しますが、ドイツの偉大な哲学者のハイデッガーが、「ヒューマニズムに就いて」という本を書いています。それを特に精読したのでありませんけれど、ハイデッガーは実存哲学者で、非常に東洋的な思想があると思う。何時かも申しましたが彼は「言葉は存在の家だ」と言っています。存在というのは實在のことでしょう。

し、その結果を授受するという。そうすると法蔵菩薩の思惟が一切衆生を救おうという願と行、それが言葉となって現れた、南無阿弥陀仏という名号となって現れたといえる。単なる呼号や名前でなく法蔵菩薩の願と行が南無阿弥陀仏という言葉となって現れた、そういうことでないか。その意味で御念仏が無限の力を持っているものであると言われるのではないかと思われます。

池山先生が最後のお言葉に「何も残るものはない、唯念仏だけが残って下さる、えらいこったよ、有難いこったよ」と仰言った、これは非常に感銘深いことなんです、このお念仏が最後に残る、お念仏しか何もないのだ、というそれは当然そうなるのではないかと思うんです。

それからハイデッガーの「我々はその住居の中に我々も住んでいるのだ」と云っていますが、我々はお念仏という願行具足の住居の中に住まわして頂いていると言えらるる意味ではないか。お念仏の中に我々も住んでいるんだという意味で、いづくに居ても、お念仏という広大な世界の中に我々は住まわされて貰っている。だから何時いのちが終ってもそこが浄土であると云えるのではないのでしょうか。

こういうことを私、近頃おぼろげながら感じさせて頂いて居り、そういう意味で池山先生は生涯を通じて、ハイデッガーの言うようにお念仏の番人であり、お念仏を護って

う。結局、存在と存在するものとは別である。我々の見たり聞いたりするものは「存在するもの」です。そしてその根底にある存在そのものの、これが實在でしょう。それが言葉として現れる——言葉に成るので「言葉は存在の家だ」と言うのです。何によって成るか、思惟によって成ると言う。「存在が言葉に成る」と書いています。思惟思考というものは存在に附属しているもので、その思惟思考が働く、その存在が言葉となる。その時にその言葉は「存在の家である」と云っています。そして哲人とか詩人はその存在の家の番人であるとも云っています。哲人とか詩人は、言葉の中にある存在を保持してゆく者であるという意味と、思惟と。

そういう事からフト思ひ浮かぶのは、南無阿弥陀仏という名号です。宗学者はこれを願行具足の名号と言いますがどうしてそう言えるのか。名号は只の名前だと思えるが、如來の願と行が具足しているのが名号であると言います。だから我々は名号によって救われてゆくのだと申します。

正信偈に「無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超發せり。五劫にこれを思惟し授受し、重ねて誓うらくは名号十方に聞えん」とあります。「無上殊勝の願を建立し云々」は本願をおこされたことで、次ぎに「五劫にこれを思惟し」という、「これ」とは「仏土莊嚴の行」これを思惟

こられた人であると言えましょう。もしそういうお念仏——念仏という言葉、名前ですが、その中に含まれているいのちというものを護り、それを監督する人が無かったら、そのお念仏は単なる言葉に過ぎない、符号にすぎないことになってしまふ。お念仏の体得者という意味で池山先生に一生を通じて、又、今も現に念仏を護って我々に伝えて下さることを泌々と思う次第であります。

次ぎに、西本宗助先生のお話を誌します。

皆さん、今日は大変ありがたいんです。と云いますのは今日は家内を連れてまいりました、それから私の弟もまいって居ります。弟がどんな方がお見えになるんですか、知らん人ばかりではないんですかと。で私はそうではないんだ、花田先生も川畑愛ちゃんも見える、向島さんも見えると申しました。すると、そんなら行こうかということでも参りました。

しかも計らずも今日は、皆様が御存じのない方をさき少しばかり紹介させて頂きましよう。興正寺派の宗務総長の千葉先生、それから上田義文先生、それから欧米を廻って来られた神戸大学長の井上善右エ門先生も居られます。上田先生は和光寮の寮長をして居られますが、この寮は米

国などの二世三世方の寮ですが、その寮生の方も参られました、端の方から申しますと、柳原ジムさん、石原君、ミス篠田、それからロスアンゼルスの新仏教会のメンバーで篤信な御家庭で仏法を身につけられているミス菊長さんも見えました。近く郷里の鹿兒島に行かれて帰米される筈です。それからアメリカやブラジルに開教師として行かれることになっている梅津君、ブラジルに行くことに決っている寺井君、これらの開教師研修所の方々にも是非来られるように願っておりますが、みんな出席して下さって大変ありがたいと思います。

この機会に私は一言、池山先生の思出を申させて頂きますと、思い出のすべてはナンマンダブツでございます。ジャーお前の現在の心境はどうかと問われましてもナンマンダブツでございます。それだけでございますが、でも一寸こんなことがありましたので申し添えます。

この間、家内の顔がいつになく朗らかでニコニコしておりまして、ケロケロ笑い始めましたので、どうしたんだと尋ねますと、本当に不思議な夢を見たと言うんです。夢の中の話らしいんですが、自分の友達が悩みが深い、本当に仏様が信じられないと色々なことを訴えられる。そこで思わず、皆さん心配は要りません、仏様が心配して居て下さる、仏様が拜んでいて下さる、仏様が願いをかけていて下さる。

念 仏 詩 抄

現代化

現代化

現代化とて

知らぬ間に

二種深信が

一種深信

かまえて

かまえて学生沙汰

せさせたまわで

往生をとげさせたまひ

候うべし

この聖人のおん言葉

ナンマンダブツ

ナンマンダブツ

みひかりの

さる。仏様が信じていて下さる、だからチツとも心配要りませんよ、と申上げたと言うんです。するとお友達は、仏様が願いをかけていて下さるってどうして判るんですかと聞かれたんで、うちの父ちゃんが仰言ることだから間違いない、と答えたんだそうです。そしたら一層びっくりした顔して聞かれる……そうした途端に夢がさめて、うちの父ちゃんが仰言ることだから間違いない、と答えている自分が誠に不思議でおかしくなって笑い出した、とこう云うんです。私はそれを聞いてまして、本当にありがたいとございまして、と云いました、こういう事でございまして。でも何時もこんなことはございません。

家内がそれにつけ加えて言うんです。夢の中で友達に申しながら、不図念頭に浮かんだのは「好き人の仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり」と、あの御言葉が思い出されて、うちの父ちゃんの言うことは間違いない、とこう申したというわけなんです。

これで話が終ればまことに立派なんです、それから二三日たちましたら、私はコテン／＼に家内からやつつけられました、本当にあなたって信頼の置けない駄目だって。ナンマンダブツでございました、ありがとうございました、これで失礼いたします。

— 続く —

木 村 無 相

みひかりの

ただ中にして

流転かな

ああ御院家さま

— 得度の師・安樂寺

千葉隆範師の初盆に

ああ

ごいんげさま

ごいんげさま

西方へ

往きませる

往きませる

ごいんげさま

ごいんげさま

ああ

かえりきて

ナムアマミダブツに

生きたもう

生きたもう

ごいんげさま

ごいんげさま

羅針盤

ナムアマミダブツは

羅針盤

人生航路の

羅針盤

いつも西方

指している

称えるままが

西の方

ナムマンダブツ

ナムマンダブツ

はずかしや

よし女曰く

「わたしは

なんにも

しりませぬ

わたしは

なんにも

しりませぬ

ただ

しらせてもらう

ばかりです」

ものしりがおの

はずかしや

わたしは

「身をすてて

世をすくうひと

あるものを

草のいおりに

ひまもとむとは

わたしは

まンまが

ナムマンダブツ

ナムマンダブツ

となえるまンまが

おん仰せ

きこえるまンまが

ナムの信

ナムマンダブツ

ナムマンダブツ

ご縁

ご縁

ご縁

みなご縁

こまった

ことも

みなご縁

ナムアマミダブツに

あうご縁

ひとりの部屋に

こもりながら

良寛さまの

このお歌をおもう

わたしは

世をすくう

ものではなくて

すぐわれなくては

ならぬもの

わたしつんで

むつかしいのは

わたしのこころ

おやさしいのは

によらいさま

わたしつんで

ナムアマミダブツ

四七・九・一〇日

教えられることども

花田 正 夫

本能主義と理想主義

私共は無数の本能的欲望を持っているが、それを大別すると名利と愛欲である。人生五十功なきを恥ず、とか、虎は死しても皮を残す人は死しても名を残す、といった立身出世主義や、恋愛至上主義やマイホーム主義等もいたるところに見ることであるが、こうした本能満足への道は、欲望が無限であるから、何処まで行っても不平と不満と焦慮の連続である。かと云ってそうした願いを捨て去ることはどうしても出来ない。

ここに、こうした問題を抱えたまま理想を追う。所謂よくなりたいたいと云う願いである。そこには、千年以上も続いた聖賢の教が掲げられている。朝に道を開けば夕べに死すとも可なり、とか、天地は失せなんされどわがことばは永久(とわ)にむなしからじ、とか、道を聞く一日は百年の生命より尊い、等々聖賢の方々は、この道を辿れ、この道に帰れ、この道に生きよ、と励まされる。しかし、その

理想の道に進もうとする時、自分の力の足らなさが知れ、どんなに鞭撻(むち)を加えられても走れない驚馬(どば)の身を歎くばかりである。それは丁度、翼を失った鳥が大空をあこがれて地上を走り廻る空しさである。

それならば、除くことの出来ぬ本能のままの生活に甘んじるか云えば、それも出来ず、かと云って理想は手のとどかぬ高根の月となりながら、この願いも捨てることが出来ない。ニイチエの言う「人生は畜生から絶対者へ渡された一本の綱をたどる綱渡りである」畜生に墮することも、絶対者になることも出来ぬあぶない綱渡りである。

本能主義も理想主義も身を托し得ないが、そこを超脱する力も無い。藤村の詩に、

悲しきかなや人の身の
無き慰めをたずねわび
道なき森にわけ入りて
などなき道をもとむらん

とあるのも、生死の海のはてしなさを教えてくれる。

如 来 の 作 願

私自身、本能主義も理想主義も安住の場でないとして知れて五里霧中をさ迷うている時、親鸞聖人の教をきいた。聖人は御自身に「いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と告白せられて、力ない私共に同座して下さり「しかるに仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごとき、われ等がためなりけりと知られて、いよいよたのもしく、おぼゆるなり」と、如来の作願(さがん)の私の上にあることを知らして下さったのである。

最近ぐりかえしまさかえし皆様と語り合っておりましてこれは「世上に立派な聖賢の教は無数にあるが、私自身が駄目なために、その教について行くことが出来ぬ。かといってそれを断念することも出来ぬ、無力であるが不滅な願いとして切ないやる瀬なきの連続であるが、このついて行けぬ身を知り尽くされて、それが捨ておけぬと、何処々までもついて来て下さる方を聖人から教えられた」と。ここに私の生活は一変した、唯泣くより外にすべのない迷い児が親の呼び声を聞いたよろこびであった、驚夫動地の慶びであった。

池山先生が或る日、この消息をたとえられて「お伊勢参

りをする、まず宇治山田の駅で沢山の宿引きの聲がかかる、次いで街の両側に土産売りの店員の聲が呼びかける。

しかし一文無しの旅人はどうであろうか。どんな呼び声も聞き流して行く外にないが、万一ここに、文無しを知り抜いて、その旅人のために宿を用意し、土産物をととのえて下さる方があったらどうであろう、その人こそ真実者である云々」と仰言ったことを思い浮べる。

目 の 無 い 魚

海(うな)底に目のなき魚のすむという、目のなき魚のこひしかりけり 若山牧水

というのがある。海底深いところには太陽の光線がとどかない。そうしたところでは眼は無用であるから自然に目の無い魚がすむのであろう。山口県の鐘乳洞の深い洞窟には、光が射さないので目のない魚がいると聞いている。

さて私共は、無明の大夜のながい／＼さすらいから、智眼を失っている。そこに、未通った是非善悪を見分ける力を失ってしまった。こういうと如何にも人生を暗く見ると云われるかもしれぬが、私自身が實際その通りである。省みれば私共が生と死を併有していることは子供も知るところであるが、私共の日常の生活において、生は肯定しているが、死は拒否している。何時かは死はまぬかれぬと頭では認めているが、まだ死にはしない、死んでたまる

かと、一生懸命に死を拒否している。そして病気が重ければ重い程、生きよう／＼となって、死をおそれ、溺れる者が藁をつかまえるように生にしがみつきの常である。稀には自分の駄目に気づき死刑囚が所刑場に力なくひかれるような臨終もあるが、そこには光明はない。長塚節氏が喉頭結核で余命一年であろうと宣告された時、生きも死にも天のまにまにと平らげく思ひたりしは常の時なりき

我がいのち惜しと悲しといはまくを耻ぢて思（も）ひしはみな昔なり

と詠じている。そこに平素、生のみをみとめ、いよいよとなると力なくして終る外にない愚かさが知らされる。

生と死がそうであるように、苦と楽もその通りである。

仏は四苦八苦満ちた人生と教えられるが、私共は何時か楽が来ると勝手にきめて実際は幻滅また幻滅の悲しみを繰り返し、性こりもなく人の世の旅を続けている。窪田空穂氏は九十過ぎで亡くなったが、

老いぬれば心のどかにあり得んと思ひたりけりあやまりなりき

と述懐されている。ここに「生死の苦海ほとりなし」とは仏が、幻影を追う私共の生活を悲憫されたやむにやまれぬ大悲の御声である。

伝えられることから「八十の老人も行えぬ」とは、禪師のありのままの姿を吐露された実語であるという一点であった。実行のともなわぬ美しい理想論をどんなに聞いても、空砲で一向に身にこたえぬが、出来る出来ぬはさておいて、行いと言葉が一致したものは、聞く者の心身にドスンとこたえる。私共が戦前に学んだ修身道徳も、教える先生が実行せずに、美談をひろい集めて説かれるので、こちらはそれをよく覚えていて答案を作ると満点がもたらえた。しかし師も弟子も空砲の打ち合いだから幾年学んでも心にすこしも残らなかった。仏法においてはこの事は非常に大事であって、聖人はいつも体解（たいげ）された上に語られている。歎異抄に、

「自余（じよ）の行をはげみて仏になるべかりける身」

「いずれの行もおよびがたき身なれば」

「愚身の信心におきては云々」

「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを」

「わが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかき」とあり、悲歎述懐和讃には

「虚仮不実のわが身にて……」

「奸詐（かんさ）ももはし身にみてり」

「無慚無愧のこの身にて……」

聖人八十八歳の自然法爾章の結びに

「是非しらず邪正もわかぬこの身なり……」

又、是と非、善と惡も同様である。自分に都合のわるい惡とか非は相手のせいにして、われ善し、われ是なりとひとりよがりの城を造っている。

こうした自分勝手な心しかないものに、正しくものごとを見ることは出来ないで、事毎にやりそこないを続けるばかりである。それも何時か正見出来るということは望めない、死ぬが死ぬまでそうした愚かさが続くのである。

鳥窠禪師と白樂天

白樂天が秦望山に登って鳥窠道林禪師を訪れると、八十幾歳の老体を鳥の様にして松の樹の上の巢の中に入って坐禪していられる。そこで「禪師の住いは甚だ危険です」と云うと、禪師は「貴下の方がもっと危険！」と警告し「貴下の内に燃える煩惱の火こそ危いぞ」と説かれた。白樂天は二の句がつけず「仏法の大意は何ですか」と問うと「諸惡を作すなかれ、衆善を奉行せよ」と答えられる。そこで白樂天は「そういうことは三歳の子供も知っています」と言葉をかえすと、禪師は「三歳の子供もいうことは知っているが、そのことは八十の老翁になっても行うことが出来ない」と叱られたのである。

私ははじめこの事を聞いて「知るは易く行うは難し」と世間に云うのと同じ位に思っていたが、先日フト気付いたことは、禪師は其時すでに八十余りで白樂天は五十歳位と

とある。以上思い浮ぶままを記したが、聖人が仏法を御身の上でうけられているのがうかがえる。而も八十八歳の絶筆において愚かさをその儘に告白されていることは道林禪師と同様で、私共の身にしみ心に徹することである。

弥陀弘誓のふねのみぞ

何時までたっても、どんな人生経験をして、始終、盲人のさすらいの外はない身で、譬えて云えば眼の錯覚と同様である、老眼や近視や乱視は眼鏡で調節出来るが、錯覚は老少善惡の別なく皆持つていて、それをなおすことは不可能である。親鸞聖人が生涯、愚禿（ぐとく）々々と名告られ、法然上人が、愚痴の法然、十惡の法然房と常に仰言ったのも、源信僧都が、余が如き頑魯（がんろ）の者と表白されたのも、前聖後賢（ぜんせいこうけん）その規を一つにされた、不可思議であるが、自然の一致である。思ひここにいたる時、龍樹菩薩和讃の

生死の苦海ほとりなしひさしく沈める我等をば

弥陀弘誓のふねのみぞ乗せて必ずわたしける

と、弘誓の船、念仏のまこと一つが唯一無二のよるべとしらされるのである。善導大師の帰三宝偈に

我等愚痴の身にして曠劫よりこのかた流転せり

今釈迦仏の未法の遺跡（ゆいしやく）

弥陀の本誓願、極楽の要門に逢えり

と、愚痴の身を慚愧し、いよいよ本願にあらうことを随喜していられる。昭和四十八年五月、稿了。

あとがき



この春は真宗十派、夫々に多彩な行事の中に親鸞聖人の生誕八百年と立教開宗七百五十年の大法要が執り行われた。聖人の法流を汲む者として夫々に心にこのことをせられたことでしょうが、弘共としては、聖人のみ教を日常の生活の中にいよいよ深く信譽させて頂くよい出発とさせてい

ただきたいものであります。さて当市に十年余住んでいられた山寿夫様が御夫妻共に健康がすぐれられず、御息女が住まれる東京都に移り住まれることになり五月十八日に駅頭にお見送りいたしました。又京都大学の東昇様が心臓病で療養中とのこと。一日も早く恢復されるように祈念しております。

近角先生の御原稿、夢幻の人生と真実の如来を拝読しながら、私の心に浮かびますのは、先生が脳溢血で一年の静養後、求道会館の報恩講の時の御法話であります。お話中に「色は匂えど散りぬるをわが世誰ぞ常ならむ、みんなみんな消えて行くのです……」と語られた時、見るもの聞くもの

ます。御自身が痛感せられているお言葉はこんな私共の心をうつものかと、今なお忘れられぬことであります。

福島先生は聖人に開眼せられてのち、聖徳太子を追慕され、法隆寺で佐伯猊下の三経義疏の講話を随喜せられました。太子には仏教の宗派的垢が微塵も見られぬ方で、私自身も、太子の教に照らされて、知らぬ間に宗派の根性に墮していることを省みさせられました。「いづれの世、いづれの人かこの法を貴ばざらん」と、生きとし生ける者、そして国と云う国のついのよるべ、そこに行かねばおさまらない、それにそむく者は亡び去る、そういう大切なものを教えられます。

信国様の求道の歷程を續いて頂き、そして榊原様の一道会記は向島諦宣様と西元宗助様との述懐を再録して下さいました。

木村さんは「念仏詩抄」の出版やら、發送、文通に寸暇のない上に本山の誕入の法要などで忙しい生活、あのウイウイしい詩が浮び出ない日々が一番淋しいとのことでした。「歌を忘れたカナリやは……」の西条八十の詩を送って、やがて「忘れたうたを思い出す」日 wait っております。

私自身の原稿を終えて「馬鹿は死ななきゃなおらない」という一句を思い出し、臨終の一念まで続く愚かさ、目のない身を思ひしらされております。

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半、南区駄上町二、八八。一道会館、例会。市電、新郊通り一丁目下車、東入ル、三筋目、左入ル二軒目。

○毎月二十四日、午前、午後。昭和区小椋町、教西寺、法話会。市電、御器所通リ下車。市バス、北山下車。

定価 半年 四〇〇円（送共）
一年 八〇〇円（送共）

名古屋市中南区駄上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正 夫

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 吉野穂志郎

名古屋市中南区駄上町二ノ八八
発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番
郵便番号 四五七